オーストリアが「欧州右傾化」の主役に

若き首相の「移民制限」に各国が共感

ドイツのアンゲラ・メルケル首相の後任は誰か？

今年五月のドイツの世論調査で、あり得ない人物がトップに躍り出た。「あり得ない」というのは、彼がドイツ国民でさえないからだ。

隣国オーストリアのセバスチャン・クルツ首相は、「どの首相候補に投票するか？」の質問で三八％の支持を集め、メルケル首相率いる「キリスト教民主・社会同盟（CDU・CSU）」の三一・五％を上回った。今年八月でようやく三十二歳。昨年十二月にオーストリアの首相になったばかりというのに、ドイツ国民から「我が国の首相になって欲しい」と強烈なラブコールを受けているのだ。

クルツ氏はウィーン生まれで、ドイツ語が母語とはいえ、一般のドイツ国民は通常、オーストリアの首相の名前を覚えたりしない。オーストリアは人口九百万人弱で、ドイツ連邦の州と比べると、第四位につけるのがやっとだ。短期間でこれほどの人気を隣国に確立し、あり得ない「首相待望論」まで沸き起こっているのは、ドイツ国民がクルツ首相の「難民・移民政策」に強く共感したためだ。

「本音トーク」に東西欧州が同調

クルツ首相は、欧州連合（EU）域外からの移民受け入れに、原則として反対だ。EU国境管理を厳格にして、そもそも入国させないのが最善策。それでも受け入れる場合は、その国の言葉を話し、その国に貢献することを求める。

ドイツの政治家では、バイエルン州のホルスト・ゼーホーファー内相（CSU党首）の立場に近いが、内相が、「イタリアやギリシャから入ってきた移民をドイツに入れない。国境で追い返す」という考えを示すと、「だからといって、バイエルンからオーストリアに入ってくるのは認めない。追い返すなら、直接、入国した国まで追い返せ」と応じて、内相を驚かせた。

クルツ首相の連立パートナーは極右の自由党。首相自身の強硬姿勢と合わせて、少し前ならば「ナショナリスト」「ポピュリスト」とレッテルを貼られるはずだが、首相に限っては、西欧首脳やリベラル系の西欧メディアにまで、受け入れられている。

ドイツ保守系紙の論説委員は、「メルケル首相を含めて、EUの中道政治家の移民に対するスタンスが、『流入制限』に大きく傾き、クルツ首相の立場に近づいているからだ」と言う。二〇一五年に百万人以上がドイツに流入した時に、国内で沸き起こった人道主義や難民歓迎論は姿を消し、有権者はポピュリストたちの「本音トーク」に耳を傾ける。クルツ氏の断固たる姿勢が、「不寛容」「非人道的」と批判されるムードではなくなった。

ハンガリーのビクトル・オルバン首相ら、移民反対派の中東欧諸国の首脳たちは、もろ手を挙げてクルツ首相の登場を歓迎した。オルバン首相は、ハンガリー国境に鉄条網のフェンスを築いて、移民がハンガリーを通過することさえ拒否したためメルケル首相に嫌われ、西欧メディアでは「ナチス」などと、さんざん批判された。

クルツ首相は、東側からも西側からも歓迎される稀有な存在になった。偶然にも、オーストリアは今年七月一日から、半年間EU議長国を務めることになり、EU各国のみか、EU離脱を決めている英国や、ロシアのウラジーミル・プーチン大統領からさえも、「首相の議長役に期待」という異例の待望論が寄せられた。

「ふだんはEU議長国のローテーションなどどうでもいいことだが、EUが十字路に立ち、進路を決めかねている時に、格好の調停役が登場した」とは、前出論説委員。当然舵を取るのは「右」方向だ。

クルツ氏がこれほど若く首相に就任したのも、一五年の移民騒動があったからだ。貴公子のような風貌だが、母親は教師、父親は技師という、ウィーンの勤労家庭出身で、育った場所には多くの移民（主に旧ユーゴスラビア）がいた。

政界に特段のコネがあったわけではない。ウィーン大学法学部在学中に、国民党青年部の指導者として抜群のコミュニケーション力を発揮した。話すのも巧みだが、相手の話を聞くのもうまい。颯爽とした風貌と相まって、後に首相のブレーン集団になる、クルツ応援団ができあがった。

REUTERS/AFLO

自国だけでなく周辺国国民からも支持される「新星」
（EU首脳会議に臨むクルツ首相、3月22日）

二十代前半で、国民党の移民対策を担当する広報をまかされた。この時、「人種差別主義ではないが、移民に寛容でもない」という姿勢の原型ができあがった。一三年の総選挙で、社会民主党が一位、国民党が二位となり、それまでの「大連立」継続が決まり、クルツ氏は外相に抜擢された。二十七歳。オーストリア史上最年少だった。

外相には、「統合担当」という職務もあった。オーストリア国内の移民、難民を社会に溶け込ませる仕事である。

寛容からナショナリズムの時代へ

ここでクルツ氏は独自色を発揮した。移民の社会への貢献度、職能、ドイツ語能力の高さを評価する一方で、モスク（イスラム教礼拝所）で使われる言葉は、ドイツ語であるべきだとするなど、イスラム教徒には厳しく臨んだ。非難を招きかねない姿勢だが、ここでも「聞き上手」ぶりを発揮して、国民からの支持を得た。一五年の難民危機では、メルケル首相と異なり、「移民襲来を歓迎しない」という立場をとった。これが国民的注目を集め、一七年六月の国民党党首選で、九九％という得票率で選ばれた。同年十月の総選挙で、第一党の座を社会民主党から奪った。首相就任はその二カ月後だった。

クルツ首相が、EUの舞台にデビューした直後から、ナショナリストからも中道からも頼られたのは、オーストリア人の特質にもよる。ハプスブルク帝国時代から、オーストリアはハンガリー、チェコ、スロバキア、旧ユーゴスラビアを版図または勢力圏に置き、宮廷は多国籍部隊だった。ウィーンは今も、クロアチアの海産物から東欧諸民族の民族料理まで、幅広く扱う国際都市だ。移民地区育ちのクルツ首相にとって、「多民族」は自然のことなのだ。

「過去十年はメルケルの時代。今後はフランスのエマニュエル・マクロン大統領と、クルツ首相が指導者役の候補だが、たぶんクルツではないか」とは、英保守系誌「スペクテイター」のコラムニスト、ウィリアム・クック氏の評だ。

賛辞の声は、トランプ米政権からもあがる。米国のリチャード・グレネル駐独大使は、「欧州の保守を支援したい」などと発言して、ドイツでは評判が悪い人物だが、クルツ首相を「ロックスターの登場だ」と手放しで絶賛する。

EU加盟各国の世論が、移民制限に傾き、国境管理を求める中で、クルツ首相はその象徴的存在として現れた。寛容なメルケル時代から、よりナショナリズムの強い時代へ――。ドイツ国民を筆頭に、欧州各国民は若い首相に背中を押してもらいたいようだ。